分野別研究組織成果報告（2005年度）

学部留学生の口頭表現能力に関する基礎的研究

On oral proficiency of undergraduate JFL(Japanese as a Foreign Language)

長谷川 哲子（HASEGAWA Noriko）

本研究は、学部留学生の口頭表現能力の概要を把握するための基礎的研究として、予備的な調査を行ったものである。本研究では、大阪産業大学の学部留学生を調査対象とし、調査対象者のそれぞれについて、ACTFL-OPI（American Council on the Teaching of Foreign Languages. Oral Proficiency Interview）を援用した口頭能力のインタビューテスト形式（１人当たり30分程度）による調査を行った。インタビュー調査は、研究期間（平成18年度）内に合計２回実施した。この調査の目的は、インタビューによって得られた発話資料にもとづき、学部留学生の口頭表現における問題点を具体的、体系的に示すことである。これらの発話資料の分析からは、口頭表現として、まとまった内容を話そうとする場合に、文どうしの接続が不適切であったり、一つのストーリーとしてまとめあげることが困難であるという問題点が散見された。また、日常的な話題ではよどみなく話せている場合でも、一般的な話題や学術的・抽象的な話題となると、とたんに流暢さが失われ、話し続けることができなくなるという言語的挫折を起こす場合も見られた。これらの問題点は、およそ、(1)適切な語彙の選択ミス、(2)話題の内容によるブレイクダウン、(3)発話の続け方・終わらせ方の不適切さ、の３つにまとめられる。そこで、こうした諸問題点を踏まえて、説明・記述タスクに対する習熟を目的とした授業実践を行った。

口頭表現において見られる問題点については、話す場面だけではなくて書く場面であるアカデミック・ライティングの範疇となる場面でも見られる可能性が示唆される。すなわち、日常的なメールには困らなくても、一般的・抽象的・学術的な内容を扱うレポートを書くのは苦手である、ということが起こりうる。この点において、アカデミック・ジャパニーズにおいては、話す場面と書く場面、それぞれの問題点に共通する部分があることが推察される。今後は、学部留学生に要求される口頭表現能力、および文章表現能力の両面から、実際の指導に資する提案が喫緊の課題である。